

平成二十九年度 定時総会報告



五月三十一日(水)に定時総会が開催され、松平頼武会長から挨拶がありました。
・本会は公益社団法人として再スタートして六年目となり、平

成三十二年度には日連教香川大会が予定されており、皆様のご協力のもと、具体的な取り組みを始めている。「夢づくり・人づくり新聞」の発行は四年目となり、今年度は、県内四十三の小・中学校での発行を予定している。新聞を増刷して生徒や地域に配布する学校もあり、活用の幅が広がっている。・教員の資質向上のために、優秀な実践研究に支援金を贈呈しているが、小中学校だけでなく、最近では幼児教育に関する報告が増えている。・教育や文化の振興に功績のある個人・団体の中で平成二十八年度は九つの団体や個人を顕彰した。・会員退職者代表一名、役員等功労者五名に感謝状と記念品を贈呈する。

会長の挨拶に引き続き、ご来賓の香川県知事浜田恵造様、香川県教育委員会教育長工代祐司様から祝辞をいただきました。

その後、①平成二十八年度事業報告 ②平成二十八年度会計決算報告・会計監査報告 ③平成二十九年度理事・監事の一部改選案 ④日本連合教育会研究大会香川大会の計画を議案審議し、承認されました。続いて、平成二十九年度事業計画並びに会計予算について報告がありました。

い。二時間指導しただけなのである。

例えば、一年生の担任になったときはこんなことを言う。入学式の後、学級の時間で、体育祭で「優勝する。」と宣言し、子どもたちに強烈なインパクトを与える。「保護者は



会社を休んでも応援にきてください。」と話し、子どもたちの逃げ道をなくしてしまうのである。あの一時間で、具体的なことを指導するだけなのである。子どもたちの意識を改革し、逃げ道は作らない。そうするとやる気生まれ、行動が変わってくるのである。

二十年間部活動の指導をしてきて、一番大切なことは、「できる」と思っているか、思っていないかだと考えている。「できる」という思いが強くなり、天狗になったり、調子に乗ったりしている時が、人間が一番伸びる。私たちの周りには、伸びる可能性を折ってしまっていることが多いように思う。子どもには、今までの体験から、「できる」と思える子どもと、思えない子どもがいる。問題は何をやってもうまくいかなかった子への指導である。私は思える情報のみを与えるよう心掛けている。「できる」と思い込んだ子は、自分から進んで取り組む。思い込ませるまでには時間はかかるが、それができるとあとは楽である。強い思いや願いは、目標

講演要旨

「かがわ教育の日」協賛事業教育文化講演会

「結果を残す私なりの指導法」について

講師 香川県立三本松高等学校 市ヶ谷 廣輝氏

私はフエンスング部の指導や高校生への指導などで、普通のことを普通にしているだけである。自分なりに工夫して二十年間指導してきたのがうまくいっているのだと思う。指導に当たって、私は四つのポイントを考えている。「強烈なインパクトを与える」「人間の持っている能力を自覚させる」「やる気にさせる。その気にさせる」「本来、自らが持つ能力を発揮することができれば、今の自分の何倍、何十倍といった成果を上げることができる」という四つである。これらをポイントに話を進めていきたい。

私は前任校の大川東高校で十一年間勤務した。平成十四年に、東高校は平成十九年に廃校となることが発表された。あと四年である。優勝しなければ、大川東高校のフエンスング部は忘れられてしまう。優勝すれば、学校の名前がインターハイの歴史に刻まれる。二位以下ではダメなのである。この時、子どもたちに「目標を持つこと」「期限を設けること」「一番強くなくても勝てる」という指導者にとって重要なことを教えてもらったのである。

春の大会は三位であった。一・二位のチームの力は群を抜いていた。私たちのチームの特長はチーム達成に必要なものを引き寄せてくる。私たちの部の練習時間は長くない。同じくらいのレベルの学校の中では一番短いかもしれない。できると思わせる指導ができているから、厳しく・長い練習の学校に伍していけるのだと思っている。

私は生徒に「人は自分の持っている能力を知ることが大切である。」ともよく話す。人は自分の持っている力を知らないことが多い。自身の力の存在を知らなければそれを使うことはできないのは当然である。

勝利を得るには三つの法則があると思っている。その一は恐怖。勝たなければ、××の罰が待っているなどというものである。二つ目は報酬。勝てば、推薦や学費免除が得られるというケースである。三つめはパーソナルモチベーション（自己の動機付け）である。これは絶対に自分はいこうなりたいと思う気持ちで、持続性、共通性がある。お分かりのよう重要なポイントである。

逆に、やる気を阻む四つの壁があるとも思っている。一つは、セルフイメージ・自分はこれくらいの人間と位置付けてしまうこと。周囲の大人がかなり低く形作っている場合が多い。とくに幼少期の対応が大切である。二つめは、コンフォートゾーン・イメージする姿が、心地よい場にあると、その場に居続けようとする力が働いてしまうことである。三位になれて良かったと思うと、それ以上にはなかなかない。三つめはホメオスタシス（恒常性）・今やる気が出ていても、何日か後にはいつもの状態に戻ってしまうことである。四つめは、メンタルブ

ワークの良さであった。チームワークは日本一、実力は三位と思っていた。ところが、十五年夏のインターハイで、彼女たちが優勝してくれた。夏までに力関係は変わっていないと思うが、目標が明確になって優勝できたのであろう。以後、十八年のインターハイまで四年続けて優勝できた。

平成十九年、私は隣の三本松高校へ転勤し、十一年目になる。本校は一一六年の歴史のある学校である。リオ五輪まで、県内の県立高校で一番多くのオリンピック選手を出していた。でも、全国一位になったことはなかった。去年初めてインターハイで女子が優勝できた。今年の春の選抜大会では、男子が優勝、女子が準優勝できた。

三本松高校のフエンスング部からは、十年間で四十人以上の日本代表選手を輩出している。しかし、彼らの半分はスポーツテストでAをとれない、しかも、大半は高校からフエンスングを始めた子どもたちであった。

私が三本松高校に赴任し、最初に受け持った一年生のクラスが、学校の体育祭の学級対抗で優勝した。以後私の受け持つクラスは、十年間優勝を続けている。私は何も特別なことをしているわけではない。

ロック。つまり、セルフイメージを上位のものに書き換え、そして、そこをコンフォートゾーンとして、恒常性を保つことで壁は克服できるのである。そうした意識は、強いものに同調していくので、壁の克服には集団の力を利用するのが効果的だと思っている。チームワークが大切になってくるのである。

話は変わるが、みなさんご存知の太田選手には、母親が本校の出身であるという縁で、子ども時代に指導に関わった時がある。大会で対戦したこともある。彼が東京オリンピック招致活動での最終プレゼンターであったことはご存知だと思う。プレゼンター選考の時、彼は全文を暗記し、何度も何度も練習して選考会に臨んだと聞いた。こうした太田選手からの刺激も受け、去年の六月に春の選抜大会では優勝すると宣言した。そして、先にも触れたように男子が優勝、女子が準優勝という結果を残せた。

今日ここで、二〇二〇年の東京オリンピックに何かで関わっていくと宣言したいと思う。記憶にとどめ、楽しみにしておいてください。

ご清聴ありがとうございました。

